2024/2/1

資料室だより　１５１

（ヴリーゲン氏寄贈による現代宗教合唱曲）

***Villa-Lobos,H.: Missa São Sebastião**（Mass in honor of Saint Sebastian）

ブラジルの作曲家としてブラジルの民俗音楽に根差した独自の語法を確立し親しまれている作曲家ですがそのなかでこの女声 3 部合唱による「聖セバスチァンのためのミサ曲」はルネサンス多声音楽の様式を踏襲し、土着的なものから離れた超越性を出しています。セバスチャンは 3 世紀末の殉教者で全身に矢を射られた図像が有名です。彼の加護により、7 世紀にローマに蔓延したペストパンデミックが収束したと信じられ、疫病から守る聖人として崇敬されています。

***Schoenberg,A.: De Profundis（Psalm 130）**

シェーンベルクの作品は今まで全くありませんでした。これはヘブライ語詩編をテキストとした 6 声部の合唱曲です。亡くなる前年に作曲されシェーンベルク最後の作品とも言われる作品が「深き淵より」というタイトルのヘブライ語であるということが意義深いことです。彼はこの作品をイスラエル国に献呈し、イスラエル音楽出版から出版されることを希望しました。

***Penderecki,K.: Stabat Mater**

20 世紀の宗教合唱曲のなかでもきわだっているのがペンデレツキのスタバト・マーテルです。13 世紀のセクエンツィアのテキストが戦争の体験を経た 20 世紀に人類の悲しみとして表現されていると感じられてなりません。曲の最後の Paradisi Gloria が唐突に明るい D dur の和音で締めくくられるのが印象的です

***Stravinsky,I.:Symphony of Psalms**

この詩編交響曲も 20 世紀の宗教作品の名曲です。詩編 39:12~13, 40:1~2, 150:1~6 のテキストに作曲されています。罪からの悔悛と嘆願、賛美へと音楽は進んでいきます。詩編は音として語られる神の言葉です。

20 世紀以降の教会音楽は、音楽的な観点からみれば著しく衰退していきました。しかし教会の外で、コンサート会場でカトリシズムの深い霊性を伝える名曲が豊かに生み出されていることに注目したいと思います。

（杉本ゆり　記）